

# 巻 頭 言

国際経営研究所所長 行川 一郎

2013年はアベノミクスの年といわれ経済活性化への期待が抱かれた年であったが、私たちの身の回りでは異常気象がここそこでわき起こった年であった。竜巻しかり豪雨しかり。特にアジア地域のフィリピンでの台風30号による災禍はすさまじい。11月にワルシャワで開催されたCOP19（国連の気候変動枠組条約の第19回締約国会議）ではフィリピン代表が地球温暖化防止を一丸となって進めてほしいと訴えた。これは地域と世界つまり地球（GLOBE）全体がつながっていることを実感させる痛ましい事例である。

GLOBALとLOCALがつながっているという意味も有する「グローバル」という合成語が今回の特集テーマであったが、研究所所員から研究論文が1篇寄せられた。タイムリーでもありいわば喫緊のテーマでもあるので、今後もこの特集テーマについては研究所の活動面においても注視、注力していきたい。

今回のフォーラムでは特集テーマの論文1篇の他、一般の研究論文3篇、研究会報告1篇、研究ノート1篇、査読論文1篇を掲載している。それぞれ日頃の研究員の研鑽と研究の結実であり、今後も成果発表の場としての『国際経営フォーラム』を支え、強化していくためにスタッフともども責任者として職責を果たしていきたい。

ところで、今年度初頭の研究所業務スタートにあたり研究員の研究活動を真に支援するために必要なことを精査した際に、当研究所が神奈川大学の研究に関する方針を踏まえ地域密着型の経営ならびに国際的な経営をも視野に入れたいわゆるグローバルな研究活動の推進を目指しているということを強く確信した。それがテーマを選定したいわば背景の一つである。多様で多彩な分野を専攻する研究員の研究範囲は正にグローバルなのである。

近時、多様で多彩な研究体制を支援すべく競争的研究資金導入といった文部科学省や内閣府等々による研究サポートが充実しつつある。また、本学におい

でもバーチャルで期間限定のプロジェクト研究所設置や研究所／センターの新設が進み、教員によっては複数の内部研究組織に多元的に所属する例が増えてきている。さらには外部の組織、機関とも係わる例も増加する一途を辿っているといえよう。当研究所では所員や客員研究員、共同プロジェクトの共同研究員たちの成果発表の場として『国際経営フォーラム』を発刊し、長く歴史を重ねてきた。その体制を支援し、さらには資金をはじめとする諸資源を強化するために当研究所の出版活動について今年度、検討をおこなった結果、国経研の『マネジメント・ジャーナル (MJ)』誌と本誌を発展的に統合することとした。MJ誌は主として外部の経営関係分野の若手研究者から投稿を募っていたがその刊行目的を毀損しないように最大限の配慮をして『国際経営フォーラム』誌に統合することとした。研究員、客員研究員以外の外部研究者の投稿も編集委員会の責任において諾否を決め、レビューをおこなうという基本方針を定めた。時代にあわせて門戸を開きつつもクオリティに配慮を払う姿勢を定めることで当フォーラム誌の価値を一層高めていけるものと確信している。

(付記：当該事案については所員各位にアンケートを実施させていただき、広く賛同を得たことを受けて常任委員会で鋭意検討後、第2回所員会議で審議承認という経過を経た。)

リボーン (reborn) という言葉は流行語としては陳腐だが、24号より新生なった当フォーラム誌を今後とも一層ご支援賜るよう、各位には衷心よりよろしくお願ひ申し上げる次第である。